

## ヤスパースにおける仏陀観の変遷

——H・ベック『仏教』の受容——

嶋田毅寛

前世紀における独の哲学者ヤスパース (Karl Jaspers, 1883-1969) は精神科医・心理学者としての経歴を皮切りに後に哲学者に転じ、終生仏教に対する関心を抱き続けたと言える。というのも『世界観の心理学』(一九一九)<sup>(1)</sup>、『大哲学者たち』(一九五七)<sup>(2)</sup>、『啓示に面しての哲学的信仰』(一九六五)、それぞれ彼の心理学、世界哲学・哲学史、宗教哲学における重要な役割を果たしていた著作中に数々の仏教学者に対する言及、仏陀や仏教者に関する一章、独自の仏陀・涅槃論が見られるからである。しかしヤスパースは仏教に関心を抱いてはいたものの特に自ら専門的に研究をしたわけではないので、彼の仏教に関する見解には多くの仏教・インド学者からの引用が見られる。その中でも本稿において特に筆者がベック (Hermann Beckh, 1875-1937) に着目した理由は、彼の著作『仏教』<sup>(3)</sup>が前記のヤスパースの著作の内『世界観の心理学』と『大哲学者たち』の二度にわたつ

て引用されており、そのためベックがヤスパースの仏教・仏陀観に強い影響を与えたと推測できるうえ、さらに同時にそれと並行してヤスパースの著作の前者から後者にかけて多少の仏陀に関する見解の変遷が見られるからである。それを筆者はヤスパースによるベック受容の変遷に起因していると捉えており、それで本研究は「ヤスパースにおける仏陀観の変遷」を、「ベックの『仏教』受容の変遷」から読み解くことを主眼としている。

### 一 仏陀の瞑想についての心的状態の純粋な観察

河上によって「価値や意味や目標といったもろもろの臆見を可能な限り排除するということから心理学という方法に依拠する」<sup>(4)</sup>ことと評されているように、『世界観の心理学』によると「世界観の心理学とは、我々の心的生が了解 (Verstehen) にと

って近づきうる範囲で、その限界を歩測 (Abschreiten) することである<sup>(6)</sup> という。このような了解しうる範囲に接近することについてヤスパースは繰り返し「純粹な觀察 (bloße Betrachtung)」と呼称する。そしてこのような觀察によって得られた「直接体験的現実 (unmittelbare Erlebniswirklichkeit) から明確なものを取り出し」<sup>(7)</sup>「それに意識外のもの (Außenbewußtes) を付け加えて思惟する (denken)」<sup>(8)</sup>ことが「世界觀の心理学」における目的であるという。そしてヤスパースはベックの『仏教』を元に仏陀の瞑想について純粹に觀察したのである。

「個々の意識領域 (Bewußtseinsphäre) は規定された世界領域 (Weltsphäre) として同時に現れる。『意識段階 (Bewußtseinsstufe) と『世界』あるいは『世界領域』という概念は仏教において完全に互いの中へ移転し (übergan) 合い、そして仏陀が見かけ上あまりにも幻想的な仕方ですれぞれ異なった『世界領域』について説いている全てのものは、まさに (引用元の当該箇所) に記述されている (das meditative Bewußsein) の経験に關係している」<sup>(9)</sup>

前記の引用は『世界觀の心理学』における唯一のベックからの引用であるが、これは彼の『仏教』における「瞑想」の章に典拠がある。ベックは瞑想により意識段階を経るにつれてそれに応じた諸世界領域が現れることを説くために、このような記述をしている。それに対してヤスパースは「部分的にはある一定

の異常な心的過程 (abnormer Seelenprozeß) に基づいている」<sup>(10)</sup>とし、このような意識段階の経過についての「純粹な觀察」に精神病理学 (Psychopathologie) を付け加えて思惟する。この仏陀の瞑想についての彼の記述に、宗教に対する彼の態度の一端が見て取れる。というのも瞑想という心的状態の「純粹な觀察」においては宗教や価値観等ではなく、精神病理学的に思惟される、としているからである。『世界觀の心理学』において、「現在の目的にとって重要ではないもの (例えばあらゆるキリスト教的なもの) を省略しよう」<sup>(12)</sup>との記述があり、これは同書の「キルケゴール報告」<sup>(13)</sup>における一文であるが、ここではキルケゴールの著作の引用中、極力心的状態に関する觀察が主とされ「キリスト教的なもの」に一切触れられていない。このような態度は仏陀の瞑想について「純粹に觀察」することと通じるものがある。それではこのような「我々の一般的な人間的構造と能力性に訴えかける哲学的世界像とは対照的に、世界領域の多様性は意識状態の多様性に起因しうる」という例として引用されたベックの言う「仏陀の瞑想」がどのように「精神病理学的」に思惟されたかという点、『世界觀の心理学』内には具体的な言及がないものの、ヤスパースの『世界觀の心理学』以前の著作である『精神病理学総論』<sup>(15)</sup>における〈偽幻覚〉 (Pseudohalluzination) という症状に、筆者は着目している。ヤスパースによると眞性幻覚が「眞の知覚に基づきそれを変革することによるものではなく、(その知覚とは關係なく) 全く新たに発生した」<sup>(16)</sup>実物的

(Leibhaftig) な妄覚であるのに対して、偽幻覚は「実物性を欠き主観的空間の内部に現象する<sup>(17)</sup>」という性質を持ち、それを「内部の目 (innere Augen)」が見るといふ。前記のベックからの引用に関する節において、神話的世界観のような特殊な経験を「内部の視力 (inneres Sehevermögen)」が見るとの記述があり<sup>(18)</sup>、この精神現象が妄覚における〈偽幻覚〉を連想させる。その他にも瞑想が達する高次の段階が「形なき領域 (Sphäre des Formlosen)」であり、それにもかかわらずその領域に現れる、神々が色彩の表象を有するなどベックが記述していることに對し、ヤスパースは偽幻覚についてそれが「客観的性質 (Charakter der Objektivität) を持たない<sup>(20)</sup>」ものの「色鮮やかな色彩 (Farbe)」を持っているとしている。このような精神病理学の見解を持っていたヤスパースなら『仏教』を読んで仏陀の瞑想を純粹に觀察し、それを〈偽幻覚〉と思惟したとしてもそれほど的外れには思われない。

次に着目する箇所は、『世界観の心理学』において仏教に対して、ニヒリズムであると言及されている点である。このことに関しては仏教に近い側から批判されるとともに、ヤスパース研究の方面から彼の仏教理解の至らなさと取り上げられることも多い<sup>(21)</sup>。しかし同時に筆者としてはここにもベック受容の痕跡を見出す。仏教学者であるベックがニヒリズムと言及しているのでもなければ、ヤスパースがニヒリズムと触れている箇所にベックの名が言及されているわけでもない。

「ニヒリズムのタイプは例えばあらゆる価値と意味を廃絶し、単に意味と価値のない現実性の肯定に固執する一方、もう一つのタイプはその現実性を保持しえず廢絶されるべきものと見出す、というのもその現実性が価値と意味の立場からいかなる仕方でも正当化し得ないからである。前者の価値のニヒリズム (Wertnihilismus) は例えば実践的な唯物論によって、他方の存在のニヒリズム (Sensnihilismus) は仏教によって代表される<sup>(23)</sup>」

このようにヤスパースはニヒリズムの類型を「価値」と「存在」の二つに分けて前者に唯物論、後者に仏教を代表させているが、これを彷彿させる言説がベックの『仏教』中に見出される。

「仏教のあらゆる神々、超感覺的世界、超感覺的能力、より高次の認識等々、これらは西欧の唯物論的思惟 (materialistisches Denken) にとって虚無 (Nichts)、空虚な妄想 (leerer Wahn) である (同様に仏教にとってその唯物論的思惟が空虚な妄想である)<sup>(24)</sup>」

ここでベックは唯物論と仏教を対比し、双方にとって他方が「虚無」と捉えられるとしており、いずれもニヒリズムとみなしているのではない。しかし先のヤスパースによるベックの引用からして、偶然ベック及びヤスパースの両者がともに、「虚無」に関して唯物論と仏教を対比させていたとは考えにくい。筆者としてはやはりベックの『仏教』からヤスパースが仏陀及び仏教徒の瞑想における心的状態をニヒリズムとする着想を得たと

見ている。ヤスパースがニヒリズムを、存在 (Sein)、価値 (Wert)、意味 (Sinn) 等を一樣に無いものと体験する虚無への意志 (Will zum Nichts) と捉えていることからして、ベックの言説における唯物論と仏教がともに「虚無への意志」という心的状態にあり、それをニヒリズムとみなしていたことも十分にありえる。そして彼が仏陀の瞑想を「精神病理学的に」思惟したことと同様に、その心的状態をニヒリズムとしたことにおいてもやはり宗教的なものを排することによる、心的状態の「純粹な観察」と見ることができる。実際に彼が仏教をニヒリズムと思惟している箇所において、仏教に関する具体的な面の言及が見出されず、いかなる典拠からこのような着想に至ったかが筆者にとっても疑問であった。その意味からヤスパースが仏陀の瞑想を純粹に観察し、それを「精神病理学的」及びニヒリズムであると思惟したことに、ベックが強い影響を与えていたと推測できる。

ここで注意しなくてはならない点は、このような「純粹な観察」と「精神病理学的」及び「ニヒリズム」とする思惟がヤスパースの仏教に関する限界であつても、仏教に対する批判を示すものではないことである。本来『世界観の心理学』という著作自体が「純粹な観察」による精神の類型化であり、それにヤスパース自身が直接に仏教研究をしていたわけではないので、この点でベックがヤスパースに与えた影響が強いと言わねばならない。

## 二 仏陀論に見られる哲学的信仰

### ——意識変革と戒律

戦後のヤスパースは世界哲学・宗教哲学・哲学史を志向し、古今東西を問わず「人類の哲学の教師」として哲学・思想家にとどまらず、数多くの宗教の開祖、宗教家、神学者等もその内に含めて『大哲学者たち』を著した。そしてその内に彼の「仏陀論」がある。『世界観の心理学』当時とは異なり、彼が哲学に転向以後であるため仏教(仏陀)観に差異があつて然るべきであるが、そこにもベックが名指しされているということは、当然ベックの「仏教」の受容の仕方自体にも差異が見られる。しかも単に同一著作というだけではなく、『大哲学者たち』でも仏陀の「瞑想」に関してベックの名が見られるということが注目に値する。

「例えば世界の諸段階についての教説がどのように、その都度新たな超感覚的世界がそこに現れるという、瞑想の諸段階の経験 (Erfahrung der Stufen der Meditation) の内にそれの対応するものを有しているのかが見られる。」<sup>26)</sup>

『世界観の心理学』におけるベックからの引用と前記の『大哲学者たち』における言説を比較してみれば、一見してほぼ同義であることがわかる。前者と同様に後者においても瞑想とは一種の意識変革であり、その意識段階に応じた「超感覚的世界」が現れるという。しかしここでは瞑想が異常心理やニヒリズム

と捉えられてはいない。それどころか救いをもたらす真の智慧 (das rechte Wissen) はこの意識変革と瞑想の段階に関係するとある<sup>(27)</sup>。しかしヤスパースは単にベックの『仏教』を肯定的に捉え直したのではない。そこに筆者はヤスパースの〈哲学的信仰〉 (der philosophische Glaube) を見て取る。それは彼の戦後における宗教哲学であり、主観・客観を包括する〈包括者〉 (das Umgreifende) に対する信仰である。一宗教における絶対他者に対する啓示信仰にとどまらない広さが特徴的であり、この包括者信仰は、信仰の主観面と客観面の両者を包括するものである。実際に『大哲学者たち』におけるベックに言及した箇所を見ると、ヤスパースは『世界観の心理学』においてのような瞑想に関してだけでなく、仏教の戒律 (rechtes Verhalten) についても触れているため、このことが包括者に対する哲学的信仰を想起させる。

「ここで仏陀と仏教の瞑想 (ハイラー、ベック) は手短にのみ特徴づけられうる……瞑想はそれ自体として成功するいかなる技法でもない。自己の意識状態を方法的に操り、ある一つを呼び出し、他方を消滅させることは危険である。このことは正しい前提もなく瞑想を試みる者を破滅させる。この前提とは全生活指針 (Lebensführung) とその清浄さである。この生活指針において高き瞬間は『油断なき思慮 (wachsamer Besonnenheit)』である」<sup>(28)</sup>

ここではベックと名指しされているものの、典拠に関して、具体

的な箇所が示されていない。しかし「油断なき思慮」についてベックにも同一の表現があり、その章が「戒律」の章であることが注目に値する<sup>(29)</sup>。というのもヤスパースは『世界観の心理学』において、『仏教』に関して瞑想の心的状態以外ほとんど触れていないように見えるからである。それは「心的な状態に対する純粋な観察」という方法論からして当然のことである。そのため瞑想という心的状態にとっては外部である、修行者の生活態度や戒律などは『世界観の心理学』においては問題とされていない。それが『大哲学者たち』においては、前記の引用にもあるように「生活指針とその清浄さ」が瞑想の前提として挙げられているのである。特にベックはこの「油断なき思慮 (正念正知, saṁsarpajāna)」について、「それを仏陀は修行者たちに推奨して飽くことのないだろう」<sup>(30)</sup>と述べており、普段の生活において常にそれを伴わせることを修行者の努めとするのである。中部經典 (Majjhimanikaya) においては「八正道の第七段階である正念 (sammāsati) に (この正念正知と) 類似した説明がなされ」<sup>(31)</sup>、この戒律が八正道の形式の内に正しい瞑想の前に置かれるその前段階として、仏教において特に深い意味を持っているとベックは語る。そしてヤスパースもベックにならつてその「油断なき思慮 (正念正知)」について言及している以上、瞑想とそれとの相互補完性を認めているとは十分考えられるし、少なくともここに挙げたベックの言説を目にしない筈はない。

「私が信仰の主観面を取り上げるならばそこに残るのは信心深さとしての信仰であり、いわばただ自分自身だけを信じているような対象なき信仰であり、信仰内容という本質的な確信を欠いた信仰ということになる。逆に信仰の客観面のみを取り上げるならば、そこに残るのは対象としての信仰内容、すなわち信条や教義や恒常的存立物といった、いわば生命のないものとしての信仰内容のみである。」<sup>332</sup>

ヤスパースは『哲学的信仰』において「信仰の主観面と客観面は一つの全体をなしている」<sup>333</sup>と述べている。その点から「仏陀論」を見てみると、瞑想（信心、主観）、戒律（教義、客観）という図式を想定できる。「信仰について語る際にはこのような主観と客観を包括するものを念頭に置く」<sup>334</sup>とあるが、奇しくもヤスパースはベックを引用している「教法と瞑想」の章において「包括者」について触れている。ここでは「言表しうるいかなる知識内容にもならない包括者のうちに（瞑想と道德的行為が結びついているという）この教えが編みこまれている」<sup>335</sup>とあり、ヤスパースが「仏陀論」において包括者に対しての哲学的信仰を想定していたことを見て取ることができる。そしてその点からすれば瞑想と教法とをそれぞれ信仰の主観面と客観面と捉えることも可能である。例えば草薙もこのようなヤスパースの仏陀論の内に哲学的信仰を見て取り、「仏陀の教えは洞見によって解脱を目指すものであり……この仏陀の洞見に対する信仰は、彼が『哲学的信仰』と呼ぶものであろう」<sup>336</sup>と評してい

る。ここで言われている「解脱を目指す洞見」とは苦の原因たる（無明）という無知を断するための知識であり、単なる悟性知ではないものの決して悟性的思惟を放棄するものではなく、「仏陀の説く真理は瞑想によって達せられるものであるが、そこにはあらゆる思惟の方法や生活態度が駆使されている」<sup>337</sup>とし、このような思惟及び生活態度といった信仰における主客の両面の同時に相並んで働くことをヤスパースの「仏陀論」の内  
に草薙は見ている。

今回ヤスパースのベック受容の変遷に伴う仏陀観の変遷を見てみたが、そこから見たことは当然彼の仏教理解の深まりもあるが、それよりも彼の立場に応じた『仏教』の受け入れ方の差異である。『世界観の心理学』にしる、『大哲学者たち』にしろ、ヤスパースの関心の中心が「瞑想」の章にあったことは疑いない。彼が『仏教』の内容にどこまで精通していたかは想像するしかないが、唯物論と仏教との対比もベックが基であるとすれば、彼は決して「瞑想」の章しか読んでいないとは言えない（それは最後の「解脱」の章に見られる）。ただ『世界観の心理学』においては「純粹な観察」と「心的状態の類型」という目的から、宗教的なものを省略することが彼の自らに課した制限であったのではないか。それに対し『大哲学者たち』においては「世界哲学」の構想のもとに仏陀も哲学の教師の一人として取り入れられ、仏陀の説く戒律が正しい瞑想の前提で

あるとヤスパースもベックにならった。そのため瞑想は単なる異常心理や精神病理学現象ではなく、彼の言う〈哲学的信仰〉における信仰の主観面とされ、戒律という客観面とともに主客を包括する〈包括者〉の様態である、主客の両側面となったと今回筆者は捉えてみた。

最後にベックその人について触れてみる。彼の『仏教』において〈瞑想〉が特に強調されていることは、ヤスパースも触れている宗教学者ハイラー (Friedrich Heiler, 1892-1967) ¹として日本語訳の訳者渡辺照宏も指摘している。ハイラーは著作『仏教的沈潜』において「仏教者にとってこの宗教的生の核心 (Nerv des religiösen Lebens) は瞑想」<sup>(38)</sup>とこうベックの言説を引用し、「最も鋭い西欧の仏教解釈者である」<sup>(39)</sup>と評している。渡辺は邦訳『仏教』の「訳者のことば」において「ベックがとくに強調するのは瞑想すなわちヨーガであって、仏教の実践の綱要をここに見出したのであった」<sup>(40)</sup>と評し、ベックが他の西洋の仏教学者の中でも異色であり、批判も多いと指摘しつつも、仏教におけるヨーガの持つ役割は認めている。そしてベックも「仏教は徹頭徹尾ヨーガ以外の何物でもない」<sup>(41)</sup>と断じている。このようなベックの『仏教』を通じて仏教に触れたヤスパースが仏陀の中でも特に〈瞑想〉に関心があるのは当然であるし、『世界観の心理学』から『大哲学者たち』にかけて、その見解は異なりつつも〈瞑想〉が中心に論じられていること、一貫していることを見ると、彼のベックから受けた影響の強さを感じ

ずにはいられないのである。

- (1) Karl Jaspers, *Psychologie der Weltanschauungen*, Springer, 1919.
- (2) Karl Jaspers, *Die großen Philosophen*, München, 1957.
- (3) Hermann Beckh, *Buddha und Seine Lehre*, G. J. Göschen, scheinungsverlagshandlung G. m. b. H., 1916. (邦題『仏教』岩波文庫・渡辺照宏・渡辺重朗訳、一九七七年)
- (4) 河上正秀『ドイツにおけるキルケゴール思想の受容』創文社、一九九九年、二五三頁。
- (5) Jaspers, *Psychologie der Weltanschauungen*, S. 6.
- (6) *Ibid.*, S. 12.
- (7) *Ibid.*, S. 21.
- (8) *Ibid.*
- (9) *Buddha und seine Lehre*, S. 172; Jaspers, *Psychologie der Weltanschauungen*, S. 192. (括弧内筆者挿入)
- (10) Jaspers, *Psychologie der Weltanschauungen*, S. 192.
- (11) 同書の同箇所 (*Ibid.*, S. 192) において「我々はそれ (ついでに言われる異常な心的過程) を精神病理学を通じて知る (括弧内筆者挿入) とある」。
- (12) *Ibid.*, S. 419.
- (13) 同書の同箇所 (*Ibid.*, S. 419) 以下が“Inhaltsübersicht”では“Referat Kierkegaards”と記されている。
- (14) *Ibid.*, S. 192.
- (15) Karl Jaspers, *Allgemeine Psychopathologie*, Springer, 1913.
- (16) *Ibid.*, S. 33. (括弧内筆者挿入)
- (17) *Ibid.*, S. 36-37.
- (18) Jaspers, *Psychologie der Weltanschauungen*, S. 192.
- (19) Beckh, *Buddha und Seine Lehre*, S. 173-175.
- (20) Jaspers, *Psychologie der Weltanschauungen*, S. 192.
- (21) *Ibid.*

- (22) 例えば理想社から刊行された『世界観の心理学』の翻訳(上村忠雄・前田利男訳、一九七一年)においては、「一般に本書でヤスパースは仏教をニヒリズムとしているが、『偉大な哲学者』たちの中では、ニヒリズムとしていない」(下巻、七五頁)との記述があり、また『ヤスパース哲学入門』(以文社、一九七三年)において草薙は、「ヤスパース自身でさえ——後には(仏陀論において)訂正してはいるが——最初はすなわち『世界観の心理学』を書いた頃には、ニヒリズムの類型を価値のニヒリズムと存在のニヒリズムに区別して、仏教を後者に属するものとしてゐるのである」(一七三頁)と述べている。
- (23) Jaspers, *Psychologie der Weltanschauungen*, S. 286.
- (24) Beckh, *Buddha und Seine Lehre*, S. 223.
- (25) Jaspers, *Psychologie der Weltanschauungen*, S. 285-286.
- (26) Jaspers, *Die großen Philosophen*, S. 132.
- (27) *Ibid.*, S. 131.
- (28) *Ibid.*, S. 133.
- (29) Beckh, *Buddha und seine Lehre*, S. 160-161.
- (30) *Ibid.*, S. 160.
- (31) *Ibid.*, S. 161. (括弧内筆者挿入)
- (32) Karl Jaspers, *Der philosophische Glaube*, München, 1948, S. 14.
- (33) *Ibid.*
- (34) *Ibid.*
- (35) Jaspers, *Die großen Philosophen*, S. 131. (括弧内筆者挿入)
- (36) 草薙前掲『ヤスパース哲学入門』一八三頁。
- (37) 同、一八六頁。
- (38) Beckh, *Buddha und Seine Lehre*, S. 176.
- (39) Friedrich Heiler, *Die buddhistische Versenkung*, München, 1918, S. 8.
- (40) 『仏教』一六六頁(渡辺照宏執筆)。
- (41) Beckh, *Buddha und Seine Lehre*, S. 138.

(しまだ・たけひろ、実存哲学、大正大学)

総合佛教学研究員)